

平成二十四年度読書感想文コンクール作品集

もろへ

大分工業高等専門学校

学生図書委員会

図書館運営委員会

# 目次

## 講評

入選	第1位	『六の宮の姫君』を読んで
	第2位	車輪の下を読んで
	第3位	『かもめのジョナサン』を読んで
佳作		『苦役列車』を読んで
〃		『羅生門』を読んで
〃		なによりも大切な命 —『生きてます15歳』を読んで
〃		『人間失格』を読んで
〃		『Good Luck』を読んで
〃		『レインマン』を読んで
〃		『アンネの日記』を読んで

## 編集後記

一般科目・国語科教員	相本正吾	……1
制御情報工学科	長生まゆみ	……2
都市・環境工学科	森田真由	……2
情報工学科	増田花乃	……3
機械工学科	川合正志	……4
機械工学科	廣瀬功哲	……5
都市・環境工学科	三重野剛行	……6
都市システム工学科	山下大貴	……7
電気電子工学科	浜野佑介	……8
機械工学科	田仲勇大	……9
情報工学科	甲斐天子	……9
学生図書委員長 (制御情報工学科 五年)	浅野早紀	……11

講 評

一般科目・国語科教員

相 本 正 吾

本年度も、例年と同様、国語教員により各クラスから選ばれた優秀作と自主投稿の作品を対象にして、教員図書委員及び学生図書委員による第一・二次審査、国語教員による厳正なる第三次審査を経て、上位作として三作品（第一位～第三位）、佳作として七作品（第四位～第十位）が入賞作として選出されました。

栄誉の第一位を得た長生さんの『六の宮の姫君』を読んで」は、『今昔物語集』の中の一話に取材した芥川龍之介の短編を読み込み、その主人公である六の宮の幸薄さきうすかつた生きざまを、受身的であり生きる遅おくしさに乏しいものとして、「情けないもの」と、長生さんは批評しています。彼女がそういった生き方をしてきたゆえに、亡くなる際に死ぬという実感を得られずにさまよえる魂となったのだという指摘は鋭いものがありました。

第二位を得た森田さんの「車輪の下を読んで」は、エリート養成学校に合格したものの、入学後に目標や自己の存在価値を見失い挫折していく主人公を描いたヘルマン・ヘッセの問題作を

読み、人に支えられることによる精神の安定のもと、物欲だけでなく、目標意識を持つて学び、生活していくことの大切さを森田さんは指摘していて、考えさせられるものがありました。

第三位の増田さんの『かもめのジヨナサン』を読んで」は、食を摂ることよりも自身の限界に挑戦して飛ぶ能力を磨き飛ぶことを愛する主人公のカモメと、生きながらえるために食を摂りただ存在するだけの群れとなっている他のカモメたちとの比較を通して、生き延びていくためには食べることも必要な私たち人間にとつて掛け替えの無い大切なものは何なのかを増田さんは深く考察しています。

佳作となった七つの作品も、まとめた内容やその表現においてすぐれている力作が揃いました。墮落した生活に陥っていかないためにも希望をもって生きることの大切さを考えた川合君の作品、生き延びていくために盗みを選んだ登場人物に生きていく人間という生き物の懸命さも読み取ろうとした廣瀬君の作品、未熟児で生まれた我が子を懸命に育て上げた母子の物語に親の愛情を思った三重野君の作品、人間失格と呼ばれた主人公の欠点として自身を受け入れて自身と向き合うことが出来なかったことを指摘している山下君の作品、幸運は自ら行動し努力することによって引き寄せるものだということを筆者の主張から学んだ浜野君の作品、自閉の兄を財産相続目当てに引き取った弟がやがてそ

の兄と親しみ共に成長していく様子に兄弟という絆のことを思った田仲君の作品、戦時中ユダヤ人として苛酷で不自由な生活を強いられたアンネの日記の中に未来に向けて戦争終結への希望や人間への信頼を読み取った甲斐さんの作品、以上、いずれの作品も、その本に出てくる人物の生き様を通して自身の生のありようを省みて大事なことを学ぼうとしている点に特徴があります。

人生は邂逅（＝出会い）であると、昭和期の文芸評論家であった亀井勝一郎氏は述べている。他者や体験との出会いの衝撃によって自身の生の内に新たなものが点火され、開かれてゆき、自己の生や自己そのものが大きく変容されていくということでしょう。人との出会いだけでなく、すぐれた書物との出会いも、その貴重な一つに入ると言えます。その人の人生の方向に決定的な影響を与えていく書物との出会いもあるでしょう。そういう意味で、学生諸君には、学生時代に、自主的に広く読書をしていく姿勢や習慣をつけて、読書を通して物事を広く深く知り、理解し、そして、批評していく力、読書を通して思ったり考えたりしたことをしっかりとした文章にまとめていく力を身につけてもらいたい。日頃のその成果として、今後も、この校内読書感想文コンクールに積極的に投稿して入賞していくことを期待しています。

第1位

『六の宮の姫君』を読んで

制御情報工学科 四年

長生 まゆみ

両親から懐なつかにいられるように育てられた六の宮の姫は、父親と母親の死によつて孤独の身となつてしまう。乳母うははと二人きりで、家財を次々と売り払つて金銭や米に替えねばならない貧しい生活を強しいられるも、姫は自分ではどうすることもできず、募つる辛つら苦くに身も心も蝕むしまれるばかりだつた。

この作品を一度読んだだけでは、主人公である六の宮の姫君は大変幸さいの薄い、憐あはれな姫であるように感じられたが、二度三度と読み重ねるうちに私は彼女の事を情けないと思うようになった。作中で姫は、ただの一度も自分の力で襲おそい来る不幸ふしごとに立ち向かおうと努力どりょくしていないからである。勿論もちろん、深窓しんそうの姫君として育つてきたのだから生きる逞たくましさに乏とほしくてもおおしくはないのだが、目の前で乳母うははが必死ひつしに働き回まわつて生活を支ささえているにも関わらず、自分はまだただ一日中、両親がいた頃と同じように歌を詠よんだり琴を弾ひいたりするだけで、知らねばならない苦勞くろうからひたすらに目を背そむけているように思われた。辛いことを経験するからこそ、

凡庸ぼんような日常の中に喜びごとを見い出すことができ、それによつて「生きる」実感を得ることができ、その結果、自らの往生おうじやうの場面において「死ぬ」という実感を得ることができず、彷徨さまよえる魂となつてしまう。

私も今迄まで、逆境に立たされた時は六の宮の様に「耐える」という選択肢せんたくしばかりを選ぶことが多かったが、それではいけなかつた。己の意志を持つて災厄さいやくをはねのけることもせず、かつ、少し努力をすれば得られる幸福さいやくに手を伸ばさずともしないことは、即ち死すなわち死ししていることと何ら変わりないということはこの作品から学んだ。そして、生きながらに死ししているということは、いざ本ほん当とうに命が尽つきて死しのうという時に死しにきれないということも教おしえられた。これからは、六の宮の姫君が持つことのなかつた「生き甲斐かひ」を常に持つてよう努つとめ、自分に与あたえられた「生なま」を力ちからいっぱい生きていこうと思う。



第2位

車輪の下を読んで

都市・環境工学科 一年

森田 真由

私はこの車輪の下という本をよんで、目的意識の重要性を考えさせられました。天才と言われた主人公のハンスは、街中の人々からの期待を一身に受け当時のエリート養成学校の合格を叶かなえました。勉強べんきやうばかりの人生であつた彼にとつて、進学校での生活は、自らの生き方を問とい直ただすきつかけにもなつたが自身の存在自体を疑問ぎもんに感じるようになってしまいました。

筆者であるヘルマン・ヘッセと主人公ハンスと重なり合う点てんがいくつかあります。ヘッセ自身も進学校在籍時に詩人への憧あこがれからノイローゼにかかり退学してしまつたそうです。その後、精神療養しんしんりやうをして高校生活を始めるが一般高校とも肌はだが合あわず後に本屋の見習みまひいとなりました。このようにヘッセと主人公ハンスは世間一般の囑望しよぼうに答こたえきれず自己の存在意義しんざいぎぎに疑問を感じその重圧じゆうあつに押し潰つぶされてしまいます。

世間では良い成績を取つて良い学校へ行くということが将来安定した生活を送れるという不文律ふぶんりつがあります。高度経済成長下の日本ではそういつた考えは成立していましたが、デフレー

シヨンや経済不況と言われている今日では物欲で心を充足することは不可能と思われれます。ハンスの様に学校に入ることだけを目標としていた人にとっては物欲は学校に合格した時点で満たされますがその先の目標を考えていなかったため精神的には満たされないうでしょう。

筆者のヘッセと主人公ハンスの大きな違いは、自殺をしてみたか否かということだ。ヘッセには精神的に病んでしまった彼の心を支えてくれた母親の存在がありました。母の存在によってヘッセは立ち直ることができました。このようにヘッセとハンスの違いを見ても最終的には精神的に心が満たされたかどうかによって生き方が大きく変わってきます。ヘッセにとつての母親の様な存在が全ての人にあるとは限りません。周囲に助けしてくれる人がいない場合もあります。その様な時には一人の人間として将来への目標を考えて行動できるかが重要であると思います。短期的な目標から長期的な目標を合わせ持つことによって人は強くなり迷うことなく人生を歩んで行けると思います。経済的な安定以上に精神的な安定を目標に持つことが現代社会を生きて行く上で最も優先されることだと考えます。

この作品から多くのことを学びましたが、私は目標意識をしっかりと持つことの大切さを改めて感じさせられました。

### 第3位

## 『かもめのジョナサン』を読んで

情報工学科 一年

増田 花乃

すべてのカモメにとつて、もつとも重要なことは飛ぶことではなく、食べることです。食べる為に飛ぶのです。しかし、ジョナサン・リヴィングストンにとつて重要なのは、食べることもよしも飛ぶことそれ自体でした。ジョナサンは、餌を食べず骨と羽根だけになりながらも、自分の飛ぶスピードの限界に挑戦し、より速く、より遠く飛ぶため日夜努力を積み重ねていました。ジョナサンの両親や同じ群れのカモメ達は、彼の行動を大変な不名誉なものだと決めつけ、軽蔑していました。しかし、それでもジョナサンはより速いスピードを追い求め、練習を重ねたので、ついにはカモメの群れから追放されてしまいました。追放されてからもジョナサンは練習を続け、様々なことを学び、新たな仲間と出会い、さらなる高みを目指すのでした。そして最終的には元々ジョナサンが共に生活していた群れに戻り、若きころのジョナサンのように飛ぶことが好きなカモメ達に、今までジョナサンが学んできた様々なことを教えるのでした。私にはどうしても、食べることに飛ぶこと

が全く反対の行為とは思えませんでした。だから、ジョナサンが群れから追い出されたのはおかしいと思いました。食べることに必死になっているカモメたちでさえエサを取りに行くときは飛ぶだろうし、飛ぶことに全ての情熱を傾けるジョナサンも、何も食べずに生きていくことはできないでしょう。飛ぶことと食べること、両方の行為が混在しているという点で、彼らは同じです。それでは、ジョナサンと普通のカモメ達には、どのような違いがあるのでしょうか。私が思うにそれは、何の為に食べるか、ということだと思います。多くのカモメ達にとつて、食べることはその日の飢えをしのぎ、生きる為に行われるのです。しかし、それでは何の為に生きているのか。食べる為に命を長らえ、命を保つ為に食べるのなら、いったい、なぜ生きているのか。ジョナサンと他のカモメ達の違いは、そこにあると思います。ジョナサンにとつて、生きることは飛ぶことです。ジョナサンは何よりも飛ぶことを愛し、生命を維持することすら捨てて自分の意志に従い、群れの中でただ一匹だけ、自分から生きていたのです。だからこそその辛く孤独な飛行訓練の中で本当の愛と優しさを知り、肉体の限界を超越した飛行方法さえ会得することができたに違いないと思います。ただ存在するだけの群れから自分自身の翼で羽ばたき、飛んで行ったこと。それがジョナサンと他のカモメ達との大きな違いなのだと思います。

た。

ジョナサンは、自分の意志で、辛い練習を続け、自分の限界へ挑戦することで、かけがえない大切な物を得られることを教えてくれました。ジョナサンと私を置き換え、私の場合は、勉強を続けて、よい結果を残せるよう、努力しようと思いました。



佳作

### 『苦役列車』を読んで

機械工学科 一年

川合 正志

主人公、北町貫太は父が性犯罪者であることや、学力の低さを理由に、中学を卒業すると同時に親元を離れ、社会に出ることとなる。

生活のため、仕事を探すのが十五歳ということがネックとなり雇ってもらえない。しかし、埠頭の冷凍倉庫での日雇いの仕事を見つけ、働くこととなった。そのもらった少ない給料を使ってしまう、再び仕事に行く、というような悪循環の日々を過ごしていった。

十九歳になっても、そんな日々を過ごし、酒や風俗に金を使うようにもなり、墮落した生活は更にエスカレートしていったのである。

そして、「何も持っていない」がゆえの劣等感・嫉妬心を抱き、将来への希望もなにもない、自分の思うがままに生きる、そのようなとにかく主人公は最低な人間であった。

私はこの本を読んで、自分自身このような最低な人間になりたくないと思ったと同時に、将来への目標、つまり「希望」をもつことの大切さに気付かされた。

自分では、「こんな社会の底辺のような人生・

人間にはならないだろう」と思っていたても、本来の人間の欲のままに生きていくと、このような人生になると思う。例えば、自分のやりたいようにやり、したくないことはしない、こんな風に自分勝手に生きること、友達はいなくなり、金も無くなり、自分自身の居場所自体無くなると思う。こう考えると、主人公の人生と自分の人生は紙一重の位置にある。すべてを壊すことは簡単でも、築くことは非常に難しいのである。

生きていくには、我慢することや耐えることも必要だと思う。世の中、自分の思うようにならないのが現実だ。当然、気にくわないことに耐えるのは苦痛だろう。けれども私達人間が、それに耐えられるのは、もつとこうしたい・もつとこうなりたいという「希望」があるからではないだろうか。

主人公の社会の底辺みたいな人生には、なんの「希望」もありやしない。しかし、そんな中でこそ「希望」をもつことで、よりよい人生になつていたと思う。その日、その日で生きていつては、なにも生活は向上しないし、一生そのままではないだろうか。

今、私が勉学に励んでいられるのは、将来への夢、つまり「希望」があるからである。普通に考えれば、当たり前のことだが、その当たり前を忘れていた自分がいた。将来への夢があるからこそ耐えることができ、自身への向上心を

持つことができているのだ。

「希望」をもつことの大切さ。こんなにも当たり前前のことを気付かせてくれたこの本に本当に感謝したい。



佳作

### 『羅生門』を読んで

機械工学科 四年

廣瀬 功 哲

「何で「羅生門」に出てくる下人は、暇を出されただけで、飢え死にをするか、さもなければ盗人になるのか、極端な選択で堂々巡りをしていたんだろう」と友人は言った。

「仕事を見つげる前に、お金を持っていなかったのだ。下人はろくな給金は貰っていないかったのかもしれない。着の身着のまま放り出されたに違いない。一文無しだ。仕事を見つげる前に飢え死にする。食べると盗むが等価だったのだろう。悪人になりきれない彼だから、悩んでいたのだ」。わたしの答だ。

そんな下人にとって、羅生門は朽ち果てるのか、盗人となり生き延びるのか岐路となる。

楼の内には幾体もの死体が置き去りにされている。人間のとうよりむしろ生き物の残骸と表現した方がふさわしい。これから迫られる選択の関頭に相応しい場所である。

そこで下人は檜皮色の着物を着ている老婆と出会う。檜皮色の着物は、元からその色ではなかったはずだ。死体の血が染みついてその色になってしまったのか。老婆の垢が染みついて変

色してしまっただのか。

老婆は放置された死体から、髪の毛を抜いている。死者に対してこのような行為をしている老婆を下人は問いつめる。盗人になるのをとどまらせている良心からだった。

「この女は蛇を干し魚と偽って売った。だが生きるための術なのでしかたがない。だからわたしにしていることも、この女は大目にみてくれるだろう」。老婆の理屈だった。

この話を聞いた下人の良心は堰を切ったようにある方向へ向かう。文中では「勇氣」と表現されているが、生きることへの選択である。「おまえがしているようにしなければ、俺が飢え死にする」と、檜皮色の着物を盗み取ってしまう。この瞬間から、下人が生物として生存を選択することとなる。

生物は「生きるためには無様なまねをしてでも生き延びる努力をする」と聞いたことがある。地球の環境が変わると、形態をも変えてしまう。隕石の衝突で地上が灼熱地獄となれば、姿を変えて地下へ、深海へと避難する。何千万年もの間とかが来るのを待ち続ける。

生きるというのはわたしたちが考えている以上に、懸命なものなのかもしれない。後天的な「盗みはいけない」という常識がどれだけの重みを持つのか、生きるか死ぬかと選択を迫られたならば、わたしには答えられない。「下人の行方は、誰も知らない」で、「羅生門」は終わ

る。この一文で生きるとはどういうことなのかとわたしは考えた。何とも言えない憂鬱な余韻が残った。

芥川龍之介は三十五歳で自殺する。生きる本能をも凌駕してしまふ芥川龍之介の創作活動の凄まじさに鳥肌が立つような気がする。命の代償のひとつが「羅生門」最後の一文であるように思えてならない。



佳作

### なによりも大切な命 ―「生きてます15歳」を読んで

都市・環境工学科 一年

三重野 剛行

僕が読んだ本は、井上美由紀さんが十五歳の時に自分のことを書いたノンフィクションの本だ。

美由紀さんがこの本を書くまでには、色々な困難があった。僕はページをめくるたびに、たくさんの驚きと感動を受けた。

美由紀さんは、お母さんが妊娠二十四週の際に破水し、あまりにも早すぎる誕生のため、超未熟児として生まれてきた。それに、その時の美由紀さんの体重は、五百グラムしかなかったのだ。僕の七分の一程の重さしかなかった。驚いたのは、体重ばかりではなかった。身長は、ボールペン程で、頭の大きさは、鶏の卵くらい、指はつまようじ程の細さ、太ももは、大人の小指ほどだったそうだ。そんな身体で生まれたため、美由紀さんは、小さな鼻や口にチューブをつけられ、保育器の中で育てられた。退院も、僕は一週間で出来たのだが、美由紀さんは、七ヶ月も入院した。その間の検査では、視力を失っている事も分かり、お母さんは大変ショックを受けたそうだ。実は、美由紀さんのお父さんは

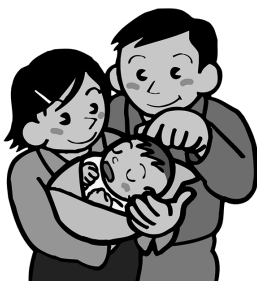
美由紀さんが生まれる少し前に、突然の交通事故で亡くなっていたので、お母さんは、たくさんの悲しみを自分一人だけで抱え込まなくてはならなかった。僕が想像する以上に、美由紀さんのお母さんは大変だったと思う。美由紀さんと一緒に死を選ぼうと思ったこともあったそうだ。しかしお母さんは強かった。「死ぬということは生きることよりも苦である」ということを知り、我が子が「お母さんありがとう」と言ってもらえるように自分も頑張ると心に誓い、一生懸命に美由紀さんを育てた。生きるからには、どんな壁も越えてみせるといってお母さんの事を「鬼のように厳しいお母さん」と書いていた。確かに自転車に乗る練習では、目が見えないからあちこちにぶつかり、血だらけになっていたも助けることはしなかったし、美由紀さんが「死にたい」と言った時も、逆に首を絞めたりして鬼の母のように思える。しかし、そんなお母さんの厳しい行動は、美由紀さんの事が誰よりも大切だからなのだと思う。

僕も親から叱られた時は、反抗したりする。でも、後に冷静になって考えると、叱られたのではなく親は僕のことを考えて注意してくれたのだと思ったりする。どの親も、一生懸命に子供を育ててくれていると思う。

この本を読んで僕は、健康に生まれたことに感謝し、これからの人生を楽しく一生懸命に生きようと思った。



人生は、まだまだこれから。たとえどんな困難が待ち構えていたとしても、自分の力と、時には、いろんな人の力も借りながら、僕もこれから大きく飛躍していきたい。僕に力を与えてくれた人に感謝の気持ちを忘れない。そして、与えられた命を大切に僕は、これからも生きていく。



佳作

### 『人間失格』を読んで

都市システム工学科 四年

山下大貴

「人間、失格。」

この小説の主人公である葉蔵は、自らに失格の判定をくだしている。しかし、ここで私は、葉蔵は本当に人間失格なのだろうか、という疑問が湧いた。確かに、自分を偽り、ひとを欺き、入水自殺を図ったりして、しまいには脳病院に入れられるといった事実を考えれば当然そうなるのかもしれない。実際に私もはじめは特に疑問に思ったりもしなかったのだが、あとがきの京橋のスタンド・バアのママの「私たちの知っている葉ちゃんは、とても素直で、よく気がきいて、あれでお酒さえ飲まなければ、いいえ、飲んでも、…神様みたいないい子でした」という発言を何度も読み返していくことによつて、一読した時とは正反対といつてもいいくらいの考えを持つようになり、前述したように疑問を持つに至った。

葉蔵は、小さい頃から人間に対して恐怖して信用しないような人物であった。しかし、ある時に人間、言い換えるなら「世間」というものに対する認識が変わり、葉蔵は世の中はそんな

に恐ろしいものではない、と思うようになる。そんな矢先に、人を疑うことを知らないヨシ子の悲劇という葉蔵にとつての決定的な事件が起こる。これにより、唯一のたのみである無垢の信頼心というものさえ失われたように思われ、しまいには、それを心配したかに思われた堀木達に連れられて脳病院に入れられ、実質、狂人ということにさせられる。このようなことを考えば、葉蔵が異常な人間であり、人間失格であるとは私は考えられないと思つた。また、葉蔵はああいう性格であるから、周りからしてみれば、表向きの葉蔵しか知らない中で内で苦しんでいる葉蔵の姿が表に出たところを見ることで、あいつは「危ない奴」という風に見られていることを思うと、あとがきに出てくる「私」の言っている事も、葉蔵がその義侠心にすがつて心を少しは開いていたであろうママの言っていることも理解できる。特に葉蔵が人間に対して恐怖しているということは、葉蔵が人間のそういった部分を持っていない、つまり、葉蔵が実は純粹過ぎたのではないか。そう思うと、「神様みたいないい子」という表現もなんら大げさな表現でなく、むしろ適当に思える。

では、葉蔵の何処がいけなかったのか。私は、それは自分を自分として受け入れる事ができていなかった所だと思つた。他人とまるで違った葉蔵であったが、それはめずらしいだけであつて、得意としていた道化なんかは誰しもがやつ

ている事だから。恥でも無い。しかし、私も実生活で受け入れたくない自分の部分が多々あり、それに向き合おうとせず、避けてきたものもある。思えば、避けてきた部分は今でも変わっていない。これを機に、自分としっかり向き合っていきたいと思った。



佳作

### 『Good Luck』を讀之

電気電子工学科 一年

浜野 佑介

この本は、「運」と「幸運」の違いそして「幸運」のつかみかたとはなにか、本当の「幸運」とはなにかを教えてくれる本でした。

この本を読んで僕自身「幸運」について考えさせられ、今までの日々への取り組みや考えが変わったと思います。この本の中に「運は、呼びこむことも、引き留めることもできない。幸運は自らの手で作り出せば、永遠に尽きることない」という言葉があります。いままでの自分は、運や幸運の違いなど考えたことがなかったし、そういうものは自分の力で引き寄せるものではなくて、偶然に訪れるようなものだと考えていました。しかし実際は、違いました。「幸運」が訪れてほしいならば信じる気持ちを持つてそのための下ごしらえをしなくては、なりません。つまり自分から行動をおこしにいかないとけません。それらは、明日からではなく今日そして今からできることをすべてやっていくことです。これらのことは、本当に今の自分につながるものだと思います。スポーツや勉強そして恋愛などです。今までの自分は、どちらかとい

うと成功するためのなにかを待っていたと思います。しかしそれでは、本当の幸運や成功を手にすることができません。発明の天才であったトーマス・エジソンも「発明は1%のひらめきと99%の努力である」という言葉を残しています。彼が才能や運などで大発明ができたのではなくて地道で大変な努力の末につかんだ成功だということがよく分かります。だから自分も努力をし成功への下ごしらえをおこなっていきたいです。

この本の最後に、「この本を書くのには、八時間しかかからなかった。だが、この本を考えるのには三年もの月日がかかった。人はもしかしたら『たった八時間か』と思うかもしれない。だがもしかしたら、『三年もかかったのか』と思うかもしれない。前者は、運の訪れを待つ者たちのこと。後者は、幸運への下ごしらえをできる者のこと。」と、あります。自分は後者のように思えます。自分はできると思っています。自分の可能性を信じていつか来る幸運へ向けて毎日努力し下ごしらえをしていきたいです。一度の自分の人生をつくるのは自分です。

佳作

## 『ライオン』を読む

機械工学科 一年

田 仲 勇 大

人と人との絆が人間の心を大きく変えるということを、この本から学ぶことができた。

チャーリーは、父が残した莫大な財産を手に入れるために養護施設から兄のレイモンドを引き取った。兄は自閉であったため、本来ならば弟のチャーリーが兄をサポートしていくべきだ。しかし、このときチャーリーは、兄のことよりも財産相続のことを第一に考えていた。

僕はこの時の彼の気持ちが理解できない。確かに、兄が自閉症となると、色々と生活が大変になるであろう。しかし、お金のためだけに兄を施設から引き取るというのは、兄にも父にも失礼だと思う。

しかし、チャーリーは兄と別れるラストシーンで父の財産を手に入れるより兄と一緒にいたいと言っている。チャーリーは、兄との生活を通して人間的に大きく成長していた。

彼を変えたのは、兄との絆であった。兄と生活している間に兄と打ち解け、お互いに思いやることができるようになって人として大きく成長したのである。

同時に僕も、人との絆の大切さを今まで以上に理解することができた。僕には弟と妹がいるが、今まであまり遊んでやれなかった。だから、これからはもっと弟や妹をかわいがって、大切にしたいと思う。

しかし、人間にとって変わるといことはとても難しいことだと思う。チャーリーは、兄と過ごした数日間大きく変わることができた。変わるためには相当な努力が必要である。

人格が変わることのメリットは、その人の人間的価値が上がることにあると思う。悪い部分を改善していくことで周りの人に好かれる人間になれるであろう。だから、人間が皆チャーリーのように良い方向に変われば平和な世の中になると思う。僕も、自分のために、皆のために柔軟に変化できる人間になりたいと思う。

この本から僕は、人との絆の大切さを学んだ。そして、今後出会っていく人たちとうまく付き合っていけるように、変わっていきたいと思う。そして、たくさんの人と思いやり、助け合って生きていきたいと思う。僕はチャーリーのように人のことよりもお金が大切だと思ったことはないが、まだまだ未熟な人間なので、これからさまざまな経験を通して、たくさん変化していきたい。そして、誰とでも楽しく過ごせるようになすばらしい人間になりたい。

佳作

## 『アンネの日記』を読む

情報工学科 一年

甲 斐 天 子

人はいったいなぜ、日記をつけるのでしょうか？私は、何年または何十年かたつてから自分で読み返してその頃の自分の気持ちや思い出をたどることができるからではないかと思えます。

ですが、自分の日記を読み返すことが許されなかった人もいます。

「アンネの日記」は、第二次世界大戦中、オランダのアムステルダムで暮らしていたアンネ・フランクという女の子の日記をもとにした話です。ただ、日記といってもこの日記はただの日記ではありません。

そのころのヨーロッパでは、ヒトラーのナチス・ドイツによつて何の罪もないユダヤ人がつぎつぎと捕まえられ強制収容所に連れて行かれ、毒ガスによつて殺されていくという恐ろしいことが行われていました。

ユダヤ人であるアンネの家族が自分たちの命を守るために隠れ家で生活しているときに書かれた日記なのです。

日記に書かれたアンネたちの生活の様子は、

想像できないほど厳しいものでした。

隠れ家は、アンネの父が働いていた会社の屋根裏のようなどころにあるのですが、下の階では働いている人がいるため気づかれないように、昼間は物音をいっさいたててはいけません。トイレも決められた時間にしか行くことができないし、風邪をひいても咳せきをしてはいけないという生活です。

私は、はつきり言って人間の生活ではないと思います。それでもアンネたちはいつか戦争が終わわり、自由に暮らせる日が来ることを信じて、二年以上の間、こうした生活に耐えていたのです。

アンネは、一五歳の誕生日の日に、日記にこんなことを書いています。

「私にとって最大のプレゼントは、人間ってすばらしいってことを知ったことです。」

私も今一五歳ですが、アンネより何十倍もいい生活をしているのにそのことが当たり前で気づかなかった自分がとても恥ずかしいと思いました。

アンネは戦争が終わる直前に、収容所で亡くなりました。この日記は、アンネが暮らしていた隠れ家で発見されたものです。

私は、自分の日記を読み返すだけでなく、この日記を使ってアンネは何か伝えようと思っていたのではないかと感じました。決して楽しいことを書いてる日記ではありません。それでも

今の時代の人達は、この出来事を忘れないように、アンネの思い出をたどるべきなのではないでしょうか。



## 編集後記

学生図書委員長

(制御情報工学科五年)

浅野 早紀

日常生活の中で本の感想を言い合うことはあるでしょうか。「面白かった」や「面白くなかった」などのような短い感想ならあるかもしれませんが、「○○に共感して、それである時のこと思い出して……」なんて長い感想を言う人はなかなか居ないと思います。しかし、皆さんの感想文を読ませていただくと、自分の境遇や経験と照らし合わせて感想を述べている人が多いように感じました。読書感想文なら、普段は言い合えない感想を文章にして伝えることができるかもしれません。

今回、私は審査委員という立場でみなさんの感想文を読ませて頂きました。感想文を審査するのは難しく、文法が正しいかどうかなんてことは図書委員長という名ばかりで曖昧にしかわかりませんし、自信もありません。そこで、審査をする上では内容のまとまりはもちろんのこと、「書かされていない」感想文かどうかを基準にさせて頂きました。

読書感想文は「書かされる」ことが多い作文だと思います。本が好きでも嫌いでも、課題と

して出されたら書かねばならない。今回応募していただいた感想文も、夏休みの課題だったのではないのでしょうか。面倒だと思えばマス目を適当に埋めた「書かされた」読書感想文を提出することも可能です。インターネットであらすじを検索すれば簡単にまとまったあらすじを見つけることもできます。そんな中で、審査をした作品の中には課題のためにマス目を埋めているだけではなく、自分の言葉で書いているなと思う作品がたくさんありました。審査する側としても、本に対する率直な感想や自分の意見が含まれた感想文をたいへん興味深く読むことができました。私は今年で卒業となりますが、これからも「書かされていない」読書感想文がたくさん応募されることを願っております。

最後になりましたが、校内読書感想文コンクールを開催するためにご尽力いただきました先生方、関係者の皆様、作品を投稿してくれた生徒の皆様へ感謝を申し上げます。また、図書館では読書感想文の他に、本の感想を思う存分語れる場として読書会を図書委員が主催しています。文章以外でも感想を言い合うことができます。文章以外でも感想を言い合うことができるいい機会になると思うので、気軽に参加していただけると幸いです。



「まねへ 第四十冊」

発行日 平成二十五年二月二十二日

発行者 大分県大分市牧一六六六番地

大分工業高等専門学校  
学生図書委員会  
図書館運営委員会

印刷所 三和印刷出版株式会社

住所 大分市高江西二丁目四三三三二二三  
電話 ○九七―五九六一七七〇〇